

## □ 評 論

## 大 坪 盛

2017年は音楽学、音楽評論の分野が世界的に注目された年として記憶に残ることになるだろう。公益財団法人稲盛財団が主催する「京都賞」は、「人類の科学の発展、文明の発展、又精神的な深化、高揚の面に著しく貢献した人々」に授与される。「先端技術部門」、「基礎科学部門」、「思想・技術部門」の3部門から構成されているが、その中の「思想・芸術部門」は、音楽、美術（絵画・彫刻・工芸・建築・写真・デザイン等）、映画・演劇、思想・倫理が対象で、4年に1度音楽が選考の対象となる。賞金は5000万円。

音楽関係の歴代の受賞者は、オリヴィエ・メシアン（作曲、フランス）、ジョン・ケージ（作曲、アメリカ）、ヴィトルド・ルトスワフスキ（作曲、ポーランド）、イアニス・クセナキス（作曲、フランス）、ジヨルジョ・リゲティ（作曲、オーストリア）、ニコラウス・アーノンクール（指揮、オーストリア）ピエル・ブレーズ（作曲・指揮、フランス）、セル・テイラー（ジャズ・ミュージシャン、アメリカ）の9人。いずれも作曲、演奏の分野である。

第33回を迎えた2017年の「京都賞」の「思想・芸術部門」の受賞者は、音楽学者・音楽評論家のリチャード・タラスキン（1945年、アメリカ生れ）に贈られた。音楽学者・音楽評論家が同賞を受賞するのは初めてのことであり同時に、作曲、演奏と共に「音楽学・音楽評論」にも光があつた瞬間であった。

これまで音楽学や音楽評論は、作曲や演奏に比べ、その地位が誤解されている感があり、一般的には作曲や演奏に次ぐものと考えられているようだ。事実、シベリウスがいみじくも言っているように、作曲家や演奏家の銅像はあるが、音楽学者や音楽評論家の銅像は見たことはない。それはともかくリチャード・タラスキンの業績をいくつかあげてみよう。

★独自の視点に基づく西洋音楽史の金字塔の著書——記譜法の発達によって、「音楽が聴覚的であるのと同じく視覚的なものになった」という観点から書かれた4000頁を超える大作「オックスフォード西洋音楽史」は、1人の著者によって書かれた音楽史としては最大のものである。

★古楽における「真正性」をめぐる批評——古楽を演奏する際に演奏者が拠りどころにしたのは、現代の価値観ではなく、作曲者の「本当の」意図や当時の演奏習慣であるが、現代の演奏者はそれに執着することなく、演奏者自身の価値観で演奏する必要があるとしたタラスキンの1980年代の「真正性（オーセンティシティ）」の議論は、古楽作品の演奏に決定的な影響を与える。

★音楽学研究の画期的な方法——該博な知識を駆使して文化・社会・政治等の広範な連関の中で対象に深く斬り込むタラスキンの手法は、作曲家を初めとする音楽学の研究方法に新たな側面を切り拓く。

★音楽における言論の創造的価値——音楽をめぐる言論が、決して作曲や演奏に従属的なものではなく、極めて創造的なものであることを自らの批評や音楽評論で示し、音楽学、音楽批評の世界に大きな貢献を果たした。

リチャード・タラスキンは受賞記念の会見で「音楽学者が受賞することはおそらく誰も予想していなかったでしょう。従来音楽の世界で一番格が上と思われているのが作曲家、その次が

演奏家、批評家と音楽学者はいわゆる音楽家の範疇に入っていなかったが、音楽を学問として研究（批評）するには、学者と同時にトレーニングを受けた音楽家であることを要求されます。その意味でも今回の受賞は『音楽学（音楽批評）』への認知をしていただいたと考えています。」と述べている。

状況は日本でも同様で、音楽学、音楽評論（音楽批評）が目されることは少ない。だが音楽評論や音楽学者が、ジャーナリズムや著作を通して、作曲界、演奏界に大きな影響を与えていることは周知の事実である。その意味でタラスキンが言うように、今回の「京都賞」受賞は、今後様々な影響を音楽界に与えることになるに違いない。

数ある日本の音楽賞に音楽学者や音楽評論家が、選ぶ側になっても選ばれる側になることは殆んどないのが実情といえる。その日本の音楽賞の中で音楽評論が対象の賞が「柴田南雄音楽評論賞」と「吉田秀和賞」である。もっとも「吉田秀和賞」は芸術全般が範疇で、基本的に既発売の著作が対象だが、「柴田南雄音楽評論賞」は応募制で、新人が対象となっている。

「柴田南雄音楽評論賞」（主催：桐朋学園）は作曲家で音楽評論でも名声を博した柴田南雄を顕彰したもので、最初はアリオンの1部門としてスタートしたが、途中から主催が桐朋学園に変わり再スタートした。今回が4回目となる。

第4回は同賞創設史上初の2人同時本賞受賞となった。堀内彩虹（東京大学大学院）と鐵百合奈（東京藝術大学大学院）の2人である。受賞作は堀内彩虹が2本の演奏会評と音楽時評「音楽の共有（不）可能性—感覚に忠実な聴取がもたらす新時代のコミュニケーション」、鐵百合奈は同じく2本の演奏会評と音楽評論「『ソナタ形式』からの解放—ベートーヴェンの『第2主題』が投げかけるもの—」。

2人とも演奏会評も長編評論も論旨が明快で充実した内容が光ったが、選評で選考委員の一人である三浦雅士が述べているように、音楽評論は「音楽」ではなく「文学」であるからには、演奏会評も音楽時評も、その要件を満たしているかが選考要素のひとつとなろう。その意味では、2人の作品は言わば、研究論的な色合いが濃い内容で、文学的な色を持つものではないところが意見の分かれるところであろうか。音楽学専攻の選考委員が半数を占めていることも今回の本賞決定の要因のひとつであろう。同賞のスタート以来受賞作は、内容的には専門的な音楽評論が多く、一般の音楽ファンが読んで面白いかどうかということになると難しい。古くは小林秀雄や、近年の吉田秀和、片山杜秀の音楽評論のように。

尚、「優れた芸術評論を発表した人」に対して授与される「吉田秀和賞」の第27回は、美術評論の著書、平芳幸浩著「マルセル・デュシャンとアメリカ—戦後アメリカ美術の進展とデュシャン受容の変遷—」が受賞している。

2017年は大作曲家、著名な演奏家の周年記念の年ではなかったので、出版された書籍に周年記念の音楽書は少なかったが、音楽を題材にした小説が重なって出版されたため話題になった。宮下奈都の調律師が主人公の「羊と鋼の森」、恩田陸のピアノ・コンクールの表裏を書いた「蜜蜂と遠雷」、クラシック・ギタリストと国際ジャーナリストの恋愛に、国際問題や民族問題、長崎の原爆問題などを複雑に絡ませた平野啓一郎の「マチネの終りに」、更にはモーツァルトの「ドン・ジョヴァンニ」が下敷となっている村上春樹の「騎士団長殺し」など、話題作（直木賞、本屋大賞など受賞）が出版された。こういう年も珍しい。

最後に訃報を記しておきたい。「演奏年鑑」の〈声楽〉を永年にわたって執筆された小山晃氏（6月）、パッハやワーグナー研究で知られる三宅幸夫氏（8月）、オペラ・レコード評の泰斗、高崎保男氏（12月）、日本の合唱界、関西音楽界の発展に貢献した日下部吉彦氏（12月）がそれぞれ鬼籍に入られた。